

～輝きの子育て～

江戸時代の幼児教育

A I時代になりました。仕事は効率的に処理されるようになりました。

一方、個人情報漏洩により、ある日、銀行預金残高がゼロになったり、おいしい情報を流し利益を得る人が出て来ました。自己の利益中心の考えが充満しています。食料は充分あり、衣服も必要以上に持ち、楽な暮らしですが、それに教育が加わってはいじめて、人間として生まれた価値があると思います。

その教育は、知識教育ではなく「人間性の教育」が必要だと感じます。知識は既にA Iに蓄積されており、東大入試問題でほぼ100%正解される時代です。

私は、江戸時代、幕末、明治維新、明治時代に輩出し、日本の近代化の礎を築いた人々はどんな教育を受けて来たのか興味を持っていました。その人たちの「根っ子」の部分は何だったのか。そんな折「四書五経の名言を読む」田口佳史著の本の中に、江戸時代に行われた幼児教育について記述されていました。

その内容を紹介させていただきます。以下に紹介する教育は「四書五経」の孟子の教育論で人間の「性善説」に立ったものです。

子弟の教育は「胎教」の重視から始まり、誕生から3歳ぐらいまでは、母性から「慈愛」、父性から「義教」を受けることによって、その子の内にある「慈愛」と「義教」が発揚されることに努めます。

3歳から6歳ぐらいまでに「慈愛」が「惻隠の心」(困っている人を見て気の毒に思う心＝人間性)に育ちます。「義愛」が「羞惡の心」(自分の不善を恥じ、世間の悪を憎む心、社会性)に育ちます。

その間「素読」により四書(大学、論語、孟子、中庸)を読み、身に修めます。その時は意味は解らずとも、後から学んだ時にスムーズに解るようになります。

集合教育は現在と同じ6歳からですが、その前が以上のようなものでした。

武士階級は「藩校」へ、庶民は「寺子屋」へ行くのが一般的でしたが、「私塾」もあり、武士、庶民に係わらず登校したようです。

素読によって「五倫」「五常」「四徳」「四端」という教えが道徳的、倫理的な規範となったといわれます。人間は生まれながらに持つ資質を「四徳」といい「仁、義、礼、智」から成っている。この四徳を相手に振ると、その人は「信じてよい人だ」と思い、その信がこちらに帰ってきて「仁、義、礼、智、信」となり「五常」となります。

この世はすべて「芽」から始まるのだから「芽」を大切に育てなければ何ものも大きくならないといい「四徳」の芽は「端緒」が重要である。これを「四端」として重視します。

(四端)

- ① 惻隠の心 困っている人を見て気の毒に思う心
- ② 醜惡の心 悪を嫌う心 己の悪を恥じて、社会の悪を憎む
- ③ 辞讓の心 譲り合う心
- ④ 是非の心 人間として正しく生きようとする判断

(四徳)

- 仁となる
義となる
礼となる
智となる

「四端」を「四徳」とし、さらに「五常」にするのが教育である。

その教育が「人間性教育」です。人間関係において守るべき五つの基本的なルールが「五倫」ですが、今回は記述しませんが、ご興味のある方はA Iに聞いてみて下さい。

これが江戸時代の教育の根本だったようです。今の教育にも貫かれている「根っ子」を育てる部分は、言葉は違いますが同じだと思います。どこの部分を強調するかだと思います。